

# ブータンに友好の庭

ブータンの首都ティンプー市に9月、同国初となる日本庭園「三春ガーデン」が完成した。三春町などの造園関係者がブータン農林省の職員らと造ったもので、今後一般公開される予定。日本庭園をきっかけに、三春町民とブータンの人たちとの交流が深まることを町関係者は期待している。



## 三春町など造園技術指導

### 初の日本庭園が完成

同国の国王夫妻が2011年、県内の被災地を慰問したことに感謝を伝えようと、国指定天然記念物「三春滝桜」の種子から育てた苗木を三春町民らがブータンで植樹したことが交流のきっかけ。ブータン側から園芸や造園に関する指導を要請され、13年から国際協力機構(JICA)の事業として、町などで作る実行委員会が技術指導を行ってきた。元三春町職員で、現在は石川町で造園会社「仲田種苗園」を経営する仲田茂司社長(59)らがブータンから計4人を県内に研修で迎え入れたほか、県内の専門家が同国を訪れて現地指導を行ってきた。

完成した「三春ガーデン」を見学するブータンの王族や農林省職員ら(仲田さん提供)

こうした事業の成果を披露し、交流の証しを残すためとして、滝桜の苗木を植えた同市の「王立花卉アメニティー造園センター」敷地内に日本庭園が造られることになったという。庭園の面積は約5000平方メートルで、日本で研修を受けた技術者やブータンで研修を受けた農林省職員ら16人が9月下旬、県内の造園

園の良さ。ブータンの人たちにもこうした日本文化を知ってもらえとうれしい。三春町民がブータンを訪れるきっかけにもなれば」と期待する。ティンプー市では10年ほど前から集合住宅が立ち並び、街の緑化が急速に進み、街の緑化が追いついていないという。仲田社長は「公園だけでなく、街に緑を採り入れる際にも日本の園芸や造園の技を活用してほしい」と話している。